

# 夢のような昼と晩

小川未明

青空文庫



赤い花、白い花、赤としぼりの花、いろいろのつばきの花が、庭に咲いていました。そうして、濃い緑色の葉と葉のあいだから、金色の日の光がもれて、下のしめった地の上に、ふしぎな模様をかいていました。

葉がゆれると、模様もいつしよに動いて、ちようど、水たまりへ落ちた花が、浮いているようにも見えました。

また、どこからともなく、そよ風に、桜の花びらが飛んできました。

「ああ、なんというおだやかな、いい日だろう。」

少年は、うっとり、あたりをながめていました。

そのとき、ピアノの音が聞こえました。

「前の家のおねえさんも、いいお天気なので、おひきなさる気になったのだろう。」

しかし、これほどよく、音と色とが、調和することがあるだろうか。

少年は、色鉛筆と紙を、そこへなげ捨ててしまいました。なぜなら、花だけをかいても、音をかくことができません。このさい、それを自分の力で表せぬなら、いつそなにも書かぬほうがよかったのです。

少年は、ただ自然の美しさと、やさしさに見とれるばかりでした。

「きのうきようは、花のさかりだけれど、一雨くれば、みんな散つてしまいますよ。」

お母さんが、けさおつしやった言葉が、ふと頭に浮かんだので、少年は、いつそうこの景色を、とうとく、いとしいものに思いました。

「金魚やあ！」と、かすかに呼び声がしました。

たちまち、少年の注意は、そのほうへとられたのです。すべてを忘れて、しばらく熱心に耳をすましました。

「どこだろうな。」

しかし、それきり、その声は聞こえませんでした。少年は、じつとしていられなくなつて、ついに、門の外へ出て、方々を

ながめたのです。

町まちの方ほうへつづく道みちの上うえには、かげろうがたち、空そらの色いろはまぶし  
かった。しずかな真昼まひるで、人ひと通りどおりもありませんでした。金魚きんぎよ  
売うりのおじさんは、きつと、あっちの露路ろじへまがったのだらう。  
そう思おもっている、こつちへかけてくる子供こどもがありました。

はじめ、その姿すがたは小さちいかったのが、だんだん大きおおくなつて、よ  
くわかるようになる、手てにブリキかんを持もっていました。それ  
は、隣家となりの武たけちゃんでした。

「武たけちゃん！ 金魚きんぎよを買かつたの。」と、少しょう年ねんはそつちを向む  
いて、大きおおな声こゑでいいました。

武たけちゃんは、ちよつと、道みちの上うえに立たちどまりました。そうして、

手に持もったかんをのぞいでいるようすでした。

これを見みた少しょう年ねんは、

「どうしたの、武たけちゃん？」と、こんどは、そのそばへと走はしりました。ブリキかんの中には、一匹ひきの金魚きんぎよが、あおむけになつて、ぱくぱく、口くちをやつていました。

「あまり飛とんできたから、びつくりしたんだよ。たつた一匹ひきなの？」

「まるこの子こだよ。尾おの短みじいの二匹ひきより、一匹ひきでも、このほうがいいだろう。」

二人ふたりののぞく頭あたまのあいだから、太陽たいようものぞくように、光ひかりはかんの中なかへ射いこんで、金魚きんぎよのからだだが、さんらんとして、真紅しんくに

金粉きんぷんをちらすがごとくもえるのでした。

「きれいだなあ……。」と、少年しょうねんは、感心かんしんしました。

「お家うちへいったら、大きな鉢おおはちへ入れてやろう。」

ふたりふたりは、走はしらずに、急いそぎ足あしとなりました。

「どうして、こんなきれいな魚さかながあるんだろうね。」

「ほんとうにふしぎだね。」

その日ひの晩ばんは、またいいお月夜つきよでありました。うす絹ぎぬのような雲くもをわけて、まんまるの月つきが、まんまんたる緑みどりいろ色いろの大空おおぞらへ浮うかび出でるのを、少年しょうねんは、家いえの前まえに立たってながめていました。いつも明あかるいのに、こよいにかぎって、ピアノのおねえさんの



家の窓は、暗かったのでした。垣根のきわに植わっているみかんの木が、黒々として、夜風の渡るたび、月の光にちかちかと、葉がぬれるごとく見えました。

少年は、なんとなくもの足りなさを感じたとき、ぷんと鼻をうったにおいがあります。

「おや、お薬のかおりだ。」

いつであつたか、少年は、おばあさんの家で、これと同じ薬を煎じるかおりを、かいだ記憶がありました。そのおばあさんは、もう亡き人であるが、はるかな駅を出発するらしい汽車の、笛の音がしました。さびしくなつて、内へはいると、お母さんは、ひとり燈火の下で、お仕事をしていられました。

「前のおねえさん、かぜをひいたのかしらん。」

「どうして？」

「お薬のかかりがして、窓が暗いのだもの。」

「そうかもしれないません。かぜがはやりますから。」

お母さんは、そうおっしゃっただけでした。少年だけは、

いつまでも同じことを考えていました。

「お母さん、月は、去年の春とちがって、あたりがあんな焼け

跡になったので、びつくりしたでしょうね。」と、少年がい

いました。

「昔から、戦争があると、こんなことがたびたびあったのです

よ。平和な春の晩にはお琴の音がしたり、お茶をにるかかりがし

て、歌うたにも『あおによし奈良ならの都みやこは咲さく花はなの、におうがごとくいまさかりなり』と、たたえられた都みやこも、今はあとかたなく、草くさがぼうぼうとしているのですから、考かんがえれば、ほんとうにさびしいものです。」

「戦せん争そうがなければ、いいんですね。」

「だれでも、その当座とうざは、戦せん争そうの悪わるいこと、恐おそろしいことを身みにしみて感かんじます。それを、じき忘わすれてしまうのです。」

「そんなら、どうしたらいいの。」

「にがい経けい験けんを、いつまでも忘わすれぬことです。そして、世せ界かいじゆうが、平和へいわのために骨ほねをおり、力ちからを合あわせて、わがままや、傲ご慢まん心しんをおさえなければなりません。」

少年しょうねんは、お母かあさんの話はなしを聞きくうちに、風かぜの音おとがしたので、

せつかく咲さいている花はなの身みの上うえを、悲かなしく思おもいました。

「私わたしたちが、こうして安あん心しんしてくらせるのも、世せ間けんに道どう徳とくが

あり、秩ちつじょ序じょがあるからです。この一いち日にちを平へい和わに送おくれたら、神かみさ

まに感かん謝しゃし、正ただしく努どり力よくされた世よの中なかの人ひと々びとに、感かん謝しゃし

なければなりません。」と、お母かあさんは、しみじみと、おつしや

いました。

夜よもふけたのに、よつぱらいどうしであろう、あつちの道みちを、

ののしりながら通とおるものがありました。

「けんかだな。」

「いやですね。おたがいが大だい事じなからだですのに。」

やがて少年しょうねんは、床とこの中なかにはいると、もう一度どこちらを向むいて、

「お母かあさん、お休やすみなさい。」と、いいました。

そして、柱はしらにかかる時計とけいのきぎむ音おとを聞きくうちに、いつのまにか、ねむってしまいました。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「僕の通るみち」南北書園

1947（昭和22）年2月

初出：「良い子の友」

1946（昭和21）年6、7月合併号

※表題は底本では、「夢《ゆめ》のような昼《ひる》と晩《ばん》」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年12月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 夢のような昼と晩

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>